中・四国

WIDE

匠を受け継ぐ

喜多流能楽師 大島衣恵さん（36） ＝広島県福山市

自然体の舞台勤めたい

ユネスコの無形文化遺産（世界無形文化遺産）リストにも掲載されている能楽（能）。室町時代以来、６００年の歴史を持つ伝統芸能だ。主役を務める「シテ方」5流派のうち、喜多流大島家は広島県福山市に能楽堂を構える異色の存在。4代目政允さん（68）の長女、衣恵さん（36）は喜多流初の女性プロ能楽師だ。「集中力の持続が大事」と厳しい稽古で芸に磨きをかける一方、子供たちへの普及・啓蒙、海外公演などに、精力的な活動を続ける。

（福山支局 杉原松二）

初舞台は2歳。「鞍馬天狗」の稚児役だったという。「むろん、全然覚えていませんが、誰かに抱っこされて舞台に立ったらしいです」。以来、物心つくころから祖父の3代目久見さん（故人）や政允さんから能の手ほどきを受けた。

自宅に能楽堂があり、「扇を持って遊んでいた」というだけに、幼いころの稽古も全く違和感はなかった。「気がつけば稽古が始まっていたという感じ」。自然に芸の道に入っていった。

「能楽少女」は高校卒業後、東京芸大に進学、囃子方の小鼓を専攻した。「いろんな流派との交流など能全体を勉強するいい機会。刺激になりました」と4年間を振り返る。

卒業後、将来について迷ったこともあった。「囃子方になったほうがいいのじゃないか」「東京に留まるべきか」。結局、「自分が能の世界で納得できる道を歩みたい」と帰郷。身近な師である祖父や父の元で研鑽を積むことを選択した。喜多流初の女性シテ方として能楽協会に登録され、プロとして歩み始めた。

平成14年、定期公演で本格デビュー。その年の欧州公演にも参加した。日本語での公演だったが、現地の人も興味を持って見てくれたという。

海外公演といえば、一昨年12月の欧州公演は特筆すべきものだった。パリやロンドンなどで全編英語の能「PAGODA」を初演、主役を務めたのだ。

この「英語能」は大きな反響を巻き起こした。能に精通している米国人らが結成した劇団と、衣恵さんら日本人能楽師のコラボレーションだった。英語の発声練習を繰り返し、米国人にチェックしてもらって舞台を務めた。「国境を越えて（能の）感動を共有できる」ことを実感した。

「『能は日本だけの能ではなく、世界の芸能』だと思っている」。英語能の作曲、演出を担当したリチャード・エマート武蔵野大教授は、同能楽堂の機関誌にこんな感想を寄稿した。

師匠でもある政允さんからは「注意を受けることはあっても、ほめられることはほとんどありません」。だが、その穏やかで控えめな人柄が舞台に反映されるといい、「自分も自然体の舞台を勤められるようになりたい」と話す。

伝統芸能とはいえ、歌舞伎などと比べると、能の認知度は低い。子供たちにとってはなおさらだ。

このため、市内外の幼稚園～高校を対象に能の体験学習を実施。学校現場に出向く出前授業のほか、見学者を受け入れ、能の基礎知識を教えている。謡、舞、型などの実技指導も行い、発表会を開く。

「能を通して最後までやりきる力がついた。勉強や生活、部活に生かしたい」。中学生からこんな感想文が届く。「子供たちは先入観なく能の世界に入ってくる。自分にとっても勉強になります」

今年は日本では初演となる「PAGODA」の再演を「絶対、成功させたい」と意気込む。さらに、女性能楽師だけの公演も企画したいという。

「能を演じる際、一番大事なのは集中力の持続。そのためにも稽古を重ねなければ」。世界へ向けてさらに精進を続ける。

ロンドン公演で英語能「PAGODA」の主役を務める大島さん（中央）。大きな反響を呼んだ ＝平成21年12月

大島家は備後地方に能楽を普及させた初代、大島七太郎が祖。長男の５代目、輝久さん（35）▽次女、文恵さん（33）▽三女、紀恵さん（30）―の３人の弟妹がおり、いずれも能楽に携わっている。県内外の大学でも講師として教鞭（きょうべん）を執る。平成13年から福山青年会議所会員となり、21年には同会議所初の女性理事長も務めた。昨年12月に結婚した。

凛とした姿勢から美しい能の「型」が生まれる＝広島県福山市の大島能楽堂

師匠から一言

世界に広める先駆者に

衣恵さんの父、政允さん

小さいころから教えた通りにこなしていた。舞台に出るのが好きだったので、指導しやすい子だった。大人になってから、（能楽という）男性社会にどう対応していくか悩んだこともあったと思う。女性としていかに表現していくか、非常に難しい点だが、稽古を積んで、それを引き出していかなければ。ただ、意識しすぎても芸が硬くなってしまう。その兼ね合いが難しい。将来は、日本にとどまらず大きく羽ばたいてほしい。海外でも能は認知されつつあり、世界に広める先駆者として活動できればと願っている。